第３３号　2012年１１月１日

カトリック仙台司教区・ カリタスジャパン
東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫　編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
TEL022-222-7371　Fax022-222-7378
1）義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2）支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

石巻ベースで行っていた「お湯出し」奉仕は、「門脇中学校避難所」の方々から大変歓迎され、避難所閉鎖の 2011 年 10 月 10 日まで続けられました。このときから、新しいベース建物の本格改修工事のため、スタッフのみで活動を継続していましたが、やっと今年の７月 11 日より、ボランティアの方々の受け入れが再開されました。そこでベース長とスタッフの方にお話をうかがいました。

石巻ベース再開
杉田ベース長と奥村さんにお尋ねしました

左：杉田ベース長　　右：奥村さん

石巻ベースが開かれたのは、３月 11 日の震災から 13 日後の３月 24 日のことでした。壊滅的な被害を受けた石巻でしたが、市内の高台にあったカトリック石巻教会は、津波の被害を免れることができました。その石巻教会をベースに、救援活動が開始されました。

全国各地から大勢のボランティアの方々が来てくださり、石巻市のボランティアセンターから依頼される瓦礫撤去や家屋の清掃などを行っていました。そのうちに、ベース近くの石巻最大の避難所と言われる「門脇中学校体育館」に避難された被災者の方々へ３月 31 日から、お湯出しサービスを始めました。この「お湯出し」は、避難所で煮炊きができず、寒い体育館の中で出される食事は冷たいお弁当等であった被災者の方々を励まし、力づけることとなりました。

石巻ベースに寄せられた感謝の色紙

しかし、ボランティアを受け入れるベースとして造られていない教会を使わせていただくことは、ボランティアの数の制限などがあり、早急に新しいベースの必要性が叫ばれ、さっそく探し始めました。丘の上の教会から下った所に新しいベースとなる建物を見つけ、８月５日引っ越すことができました。しかし、このベースは、以前「焼肉屋」だったところで、８年間使われておらず、また津波被害に遭ったまま放置されていたところでした。そのため、ベースの清掃、片付けなどをしながら、「私たちが、ここにいる間、お湯をお願いしますね」という被災者の皆さんの声に応え、最後の方が仮設に移られるまで「お湯出し」を続けました。

門脇の避難所が閉鎖されたのは、昨年 10 月 10 日。ベースの改修工事は９月 30 日から始まりましたが、本格的な工事が始まったのは、その後のことでした。私たちは、ベースの改修工事が終わるまでボランティアの受け入れをせず、５人のスタッフだけで仮設でのカフェを行っていくことに決めました。最初から、ビーズ細工の手ほどきをし、ご一緒に楽しく創っていくことを通して親しくなり、傾聴にもつながっていくように努力しました。

工事資材の不足、職人さんの不足などで、工事が遅れに遅れ、やっと１階スペースが使えるようになり、今年の１月 28 日、新しい石巻ベースを再オープンすることができました。

しかし、防水、水まわりなど、肝心なところの工事が進まず、ボランティア受け入れを再開できたのは、７月 11 日のことでした。

石巻ベースの定員は、男性４人、女性４人でこぢんまりしています。ボランティアに来てくださる人に、石巻ベースでは、可能な限り、どの方にも仮設でのお茶っこ、ベース１階で人々を迎えること、米川ベース（南三陸）でのボランティアの支援にかかわっていただきたいと計らっています。それに加えて、被災地巡りを行っています。再びボランティアの人を受け入れたことによって、ベースに活気がでてきました。ボランティアの人との分かち合いは、お互いがその日、違ったことをしていても共有でき、お互いの助けになります。その分かち合いの内容は、私たちの活動のヒントとなることも多く、スタッフが学ぶことも多いです。

現在、私たちは、石巻市内にある７つの仮設住宅と、東松島の４カ所の仮設住宅に住む被災者の方と関わっていますが、その他、１階のオープンスペースでいろいろな企画を実現することによって、地元の人、町内会の人、教会関係の方々と関わりが広がり、継続されているのはうれしいことです。人々の中には宗教への警戒心もありますので、「カリタスって何ですか」と尋ねられる時、喜んで答えているようにしています。

震災以降、石巻ベースを中心に、地元の被災した人々とかかわってくださった多くのスタッフやボランティアの方々のおかげで、「カリタス石巻ベース」の働きを評価し、「カリタス」への信頼ができていることを強く感じます。

これからも「カリタス石巻ベース」として、「復興支援」の具体的な形、活動の仕方を考えていく必要があります。また１年ごとに交代していくスタッフも多い中で、被災地の人々に「寄り添って」共に歩んでいくために、何を、どう引き継ぎ、つないでいくかを考えていかなければならないと考えています。

講習会風景→

←外のブルーシートが外された石巻ベース全景

仙台中央地区に属している八木山教会は、震災以来、被災した亘理町を重点的に支援してきました。亘理町は内陸４キロまで津波が押し寄せ、荒浜地区の被害がひどかった所です。教会の信徒がおられる仮設住宅を訪問し、傾聴活動と仮設の被災者の方と着物を洋服や小物にリメイクする活動を続け、参加者の希望によってファッションショーを開くまでになりました。また、県南４教会と共に、福島巡礼も行いました。

楽しい仮設のファッションショー

八木山教会の震災支援グループ、「八木山オリーブの会」主催の仮設住宅ファッションショーが９月２６日に亘理町旧館集会所で開かれました。

「八木山オリーブの会」は今年２月から毎月２回仮設を訪問して、被災者と共に和風布の仕立てを工夫して行ってきました。被災者の方が半年間に作った作品をお披露目するため、ファッションショーが開催されました。作った人がモデルになって赤い毛氈の上を歩きます。モデル歩きの練習の時から笑顔が溢れてみんな爆笑です。手製のワンピースやベスト、バックなどたくさんの作品を持ち込んだ人は自分だけではモデルが足りず、オリーブの会のメンバーもモデルになって一緒にポーズを取って歩きました。

いつもは、男女別々の活動ですが今日は一緒です。「カアチャンの晴れ姿をみとかにゃ後が怖い？」エスコートする男性も声がかかるのを待っています。春夫さんは小学校時代の学級委員で８０歳を超えた今でも人気があります。「春夫ちゃん一緒に歩こうよ」モデルに引っ張り出されて照れ笑い。子供にもどって笑顔溢れる学芸会のような雰囲気になりました。

お披露目の後は、モデルにインタビューです。「裏地の絹をコーヒーで染めてスカートにしたの」「踊りの着物でドレスを作ったの、見て、見て！」「私は木の実でアクセサリーを作って服に付けたの。」みなさん色々な工夫をして楽しんでいました。

ファッションショーの後はみんなでお茶っこ。作品の服を見ながら「これいいネ」「私に作って。」「あんたもモデルしていたの？」「わかった？　きまってたでしょう！」こんな会話で盛り上がっていました。

最後に和風布の仕立ての先生をしてくれた竹内哲子さんから「みなさんの笑顔が私たちの励みになっています。これからも作品を作りながら楽しくやってゆきましょう。」と挨拶がありました。

「八木山オリーブの会」は、これからも被災者の方々と和風布の仕立てを続け、洋服だけでなく小物やバックも作っていきます。今後はフリマでの商品販売のお手伝いや、外に向かっての活動にも協力し、みんなが仮設住宅から出る日まで続けようと考えています。

このファッションショーの感激は文字では表せませんのでビデオに撮りました。まずは出演者の仮設の方々と着物を提供してくださった全国の教会や個人の支援者にお渡しするために編集し、その後八木山教会と仙台地区の教会にも機会があれば紹介する予定です。

八木山オリーブの会　　野田和雄

県南４教会との巡礼の旅

９月 30 日は、県南４教会と共催で、バスで行く「南相馬地区被災地見学と原町教会巡礼」の当日です。参加者は、亘理教会から 14 名、角田教会から１名、大河原教会から９名、白石教会から６名、八木山教会から 12 名の計 42 名でした。

企画実現の背景

3．11．東日本大震災発生後、仙台教区は「新しい創造」計画を発表。基本計画の一つとして、国道４号線沿いの内陸部の諸教会が、６号線、45 号線沿いの被害を受けた地域の諸教会との交流支援を深め、被災した人々を支援する、いわゆる「仙台教区＜４→６、４５＞計画」の推進です。

八木山教会は、仙台中央地区７教会の中で、最も南に位置する教会です。11 年６月の教会委員会で、県南４教会との連携強化、継続的な関係の構築、毎月１回の訪問を定め、その実行に努力しております。

今までに行った主な交流は、昨年５月の亘理教会での合同ミサと交流会、昨年と今年の８月、八木山教会での４教会合同の被昇天の祭日ミサ、そして焼肉パーティー、11 月には亘理教会での合同ミサ、ふれ合いマーケットの開催等々、また、八木山オリーブの会の旧館仮設傾聴活動に対しても、亘理教会を中心にご協力をいただいております。今回の巡礼も、その一環として実行されたものです。

原発警戒区域周辺の放置されたままの家屋

巡礼の様子

午前９時過ぎに八木山教会を出発し、大河原教会、亘理教会を経て、お昼近く原町教会に到着。昼食後、原町教会の信徒の方の案内で、南相馬地区の地震、津波、原発事故と三重苦に苦しむ現場を訪問しました。

今年４月、警戒区域が半径 20 キロから 10 キロに縮小された周辺は、昼間だけの帰宅許可。未だに、船、車、全壊家屋が放置されたままで、昨年の震災時にタイムスリップした様です。当時、テレビ、ラジオで見聞きし、涙したものですが、参加者一同、あらためて心に痛みを感じました。残念なことですが、大都市を中心に、早くも震災に関し風化現象が見られ、ボランティアの方々も激減している現状を我々東北人として悲しく残念に思っています。

14 時から原町教会で、狩浦正義神父（原町教会主任代行）、小野寺洋一神父（県南４教会担当司祭）の共同司式によるミサが執り行われました。約 70 名の参加者が心を合わせて、被災者を思い、被災地の１日も早い復興を神様にお願いしたミサとなりました。

こうして、９時間にわたる各教会信徒との交わりは、互いの絆を強める機会となり、県南４教会と八木山教会の結束を固める巡礼であったとは、参加者一同が感じたことでした。

八木山教会　片岡保彦

シスターズリレー　２０１２

祈りで紡ごう連帯の輪

東日本大震災の後、日本の活動修道会の連盟組織である「日本女子修道会総長管区長会」は、日本中の女子修道会に声をかけ、2011 年４月１日から１週間ずつ、各会のシスターたちが３人～４人、各ベースを支援するためにマラソンリレーのように、支援のリレーをつないでいこうという「シスターズリレー」が始まりました。

釜石、米川（南三陸）、石巻、塩釜の各ベースに派遣されたシスターたちは、各地から来られるボランティアの方々の食事作りをはじめ、ベースのお母さん役として、あるときは励ましの言葉で、あるときはほほえみで活動から疲れて帰って来るボランティアさんたちをやさしく迎え、ベースを支えてきました。この第１次「シスターズリレー」の形は、2012 年３月 31 日で終了しました。

シスターズリレーは終了したといっても、少しでも被災地の方々のお役に立ちたいと望まれるシスターたちは多く、あるシスターは１年間の予定で、あるシスターは１ヶ月、またあるシスターたちは毎週曜日を決めてベースでの活動に参加してくださっています。

そして、第２次「シスターズリレー」として、７月 29 日から「シスターズリレー2012」が始まりました。

今回の特徴は、実際に被災地に足を運び、被災者の方々や、ボランティアの方々に奉仕をすることはないのですが、被災地が早く復興できますように、また被災された方々との絆を強め、祈りのリレーで全国を、北からと南からでつないでいこうというものです。

すでに、10 月６日までに 20 の修道会で、それぞれの心を込めた祈りを捧げてくださっています。これらの祈りの様子は、「日本女子修道会総長管区長会」から、全国の修道会に伝えられています。昨年は、病弱や高齢のために実際の活動に参加できなかったシスターたちから、私たちも祈りで加わりたいという熱い願いが届けられ、このリレーに実を結んだということです。

2011 年、シスターズリレーが始まり、日本のカトリック教会のシスターたちが、自分たちの修道会の枠を乗り越え、東日本大震災の被災者、被災地のために一致して活動する姿が、多くのキリストを知らない人々に、感動を呼び起こしました。それは、祈りのリレーにも引き継がれ、ますます人々の心に、神様の愛ややさしさ、カトリック教会の存在、奉仕するシスターたちの存在が刻みつけられていくことでしょう。

皆さんのお力を貸してください。

ボランティアさんが足りません。

ご協力をお願いいたします。